次郎長

次郎長翁を知る会
会報　第21号
平成19年6月12日発行
発行所
〒424-0821
静岡市清水区相生町6－17
静岡市観光協会清水支部内
TEL（054）352－7331
発行人　竹内　宏
題字
編集人　田口英爾
印刷所　㈱ニシガイ
TEL（054）352－2188

次郎長生家最後の子孫

副会長　長田三則

次郎長の実父「雲見ず三右衛門」直系の子孫「高木三寿郎」は「三ちゃん」と呼ばれ、地元の人たちに親しまれた。明治二十二年生れ、昭和三十九年没。独身のまま亡くなったので、次郎長生家高木家の最後の当主となった。残された一枚の写真をカギに、交流の深かった長田副会長が、その思い出を書きとめた。

最近、次郎長生家最後の子孫といわれる高木三寿郎、通称三ちゃんが話題に上がってきました。話題のきっかけは、清水地区連合自治会長だった鈴木昭治さん（故人）が提供された一枚の、晩年の三ちゃんの写っている集合写真からでした。

写真のことは後回しとして、編集部からの注文に応えて、三ちゃんについて、私の記憶に残っていることの断片を、ここで書き留めておきたいと思います。

昭和三十年代の次郎長生家。下は店先。左は勝手口（戸田書店刊「人間次郎長」より

縁というのは不思議なもので、私の生れる前、両親や兄・姉たちは大正の終わりから昭和の初め頃、美濃輪の次郎長生家に住んでいました。今の生家と同じ二階建の二階を借りて住んでいたのです。明治二十二年生れの三ちゃんは一生を独身で過ごしましたが、薪炭を商う高木家の当主であり、私たち一家にとっては家主というわけです。

私が生まれたのは昭和五年、その頃には、すでに私たち一家は美濃輪の次郎長生家から、今の現住所である八千代町（当時松井町）に移っておりました。

ところが、三ちゃんは、生家から歩いてほんの数分の距離とはいえ、私たちが移り住んだ家を、頻繁に訪ねて見えました。

▽後列左から２人目が三ちゃんこと高木三寿郎

美濃輪老人クラブの人たちと。昭和三十年代。

私が小学校に入学した頃だと記憶しておりますが、三ちゃんは毎日のように駄菓子を持ってきて「おい、坊主いるか」と声をかけます。

今思うと子供もおらず寂しかったのでしょう。二人で飴をしゃぶりながら何を話したのかは記憶が薄れておりますが、楽しかったことは、昨日のように覚えております。

終戦後は薪が不足していて家の燃料は造船所の

廃材でした。船材は固く、十五歳の私には歯がたちませんで、薪割りには苦労の連続でした。しかし、三ちゃんは薪割りが大好きで、薪割りの後、必ずアンコ物入りのお菓子を食べて楽しんでいたようです。

さて最初にふれた集合写真についてですが、地元老人クラブの集まりで、美濃輪稲荷拝殿前で撮ったこの写真の左から二人目が、三ちゃんこと高木三寿郎さんです。

この写真を見てまっ先に目に入ったのが、忘れもしない三ちゃんの顔でした。特徴は太い眉毛です。次郎長さんの写真と比較すれば良く判りますが大きい特徴です。三ちゃんは人柄も良く、特に可愛がってもらったせいかもしれませんが、後日、次郎長さんが子供を可愛がったという話を聞いてやはり血の繋がりかなと思います。

次郎長さんが渡世人時代でも本当の任侠道による精神で物事を解決したであろうと信じます。

次郎長さんの声ですが、三ちゃんの肉声は黄色い高めの声でした。浪曲や講談師の声と違うのではないかなと思うこの頃です。

高木三寿郎さんは、昭和三十九年（一九六四）九月二十三日七十五歳で亡くなりました。戒名は常然三楽居士。梅蔭寺の高木家墓地、次郎長の父親、雲見ずの三右衛門といっしょに眠っています。

私は昭和三十九年当時、中部電力㈱名古屋本店に在職中で、お墓参りが出来ませんでした。これを機会にお線香をあげに行く予定です。

（編集部注・清水小学校に残された学籍簿によれば「小売商高木三右衛門長男高木三寿郎、明治二十二年十二月生れ」と記されている。）

美濃輪稲荷に残された次郎長の名

中田元比古（運営委員）

美濃輪稲荷は、次郎長が生れ育った生家や甲田屋の目と鼻の先。境内は腕白時代の次郎長の遊び場だ。その稲荷神社の石柵に次郎長の実名が刻されている。発見した中田元比古さんに現場をレポートしていただいた。（編集部）

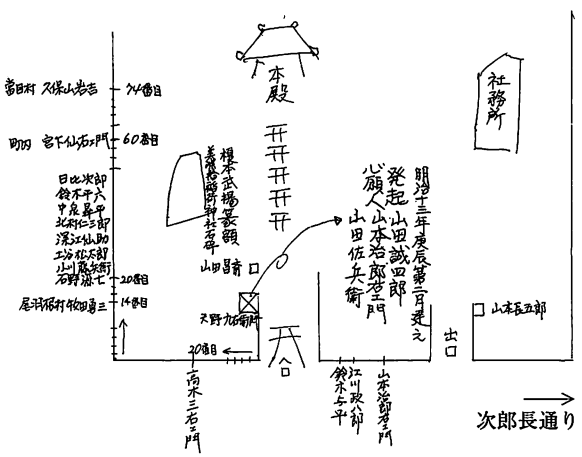
清水区美濃輪町。次郎長が生まれ、二十三歳で無宿者になるまで青春時代を過した地だ。

当時の清水港は巴川の内にあり、河口から上町に至る西岸沿いは廻船問屋が立ち並び、関西と関東の中継点でして、塩や米、酒などの荷を積んだ千石船が出入りする港として栄えた。特に美濃輪の南端（現在の清水小学校付近）には幕府の米蔵があって、このあたりは米問屋と廻船宿で賑わっていた。次郎長の生家や甲田屋も一歩裏へ出れば、そこは小揚げと呼ばれた人足衆が米俵や荷を渡す威勢のいい声が聞こえてくる。心地好い浜風を存分に吸って次郎長は育った。

美濃輪町には約三百年前（享保五年・一七二〇）に遷座したと伝えられる稲荷神社がある。この神社には次郎長が幼少の頃相撲を取って遊んだエピソードがあるが、もう一つ関係するものとして、神社を囲う石柵に、晩年の次郎長が、大型船時代の到来と外海港の築港の必要性を廻船問屋後継者たちに説き尽力した証が刻まれている。

明治十三年（一八八〇）に建造された石柵はかなり破損もひどく、欄干に彫られた寄進者の名前も全てを読み取ることは出来ないが、当時の地元の有力者の名とともに次郎長の実名「山本長五郎」の名もしっかり確認できる。注目すべきは中央の石鳥居傍の参道に面して並ぶ石柵で、「静岡丸」

美濃輪稲荷神社



「三保丸」「清川丸」といった後の静隆社の持ち船の名と横浜定期航路の中心人物の一人であった「天野九右衛門（天野回漕店経営者）」の名がある。

江戸幕府が倒れ、それまで幕府の庇護を受けてきた港も衰退の危機を迎えることになる。清水町の廻船問屋は次郎長の呼びかけのもと、自らの進退をかけて立ち上がり、お茶の輸出を切り札に外港に打って出る。明治十二年、向島に波止場を築造し、港橋が架橋された。

もう一人、注目の人物の名が「九右衛門」の隣にある。発起心願人の中央に「山本治郎右衛門」と彫られたその名は甲田屋の主人のものである。明治十三年、それまで岡の八幡神社を氏神としていた美濃輪町民百九十七戸が、心願して正式に美濃輪稲荷神社の氏子になったと清水町沿革誌に記されている。米商人として財をなした甲田屋にとって同町の稲荷神社によせる信仰も厚かったに違いない。

美濃輪稲荷神社正面

石柵は美濃輪町を含む旧清水町の氏子や静岡の茶商たちによって建立されたものであるが、甲田屋の治郎右衛門も中心の一人として発起心願し成就した記念のものだろう。併記された二人の商人や廻船問屋経営者たちの名を見ていると、清水港が、米や塩中心の河口港からお茶中心の外海港へと移り変わる激動の時代を垣間見る想いである。

そして両者を取り持ち、清水港の未来と発展を見つめた「山本長五郎」の名は意外にも、出口の柱の一番最後に彫られていた。それもまた感慨深いものがある。

以上の他に次郎長の関係で石柵に確認できた人物名は、生家当主の「高木三右エ門」。次郎長一家からは増川仙右衛門こと「宮下仙右衛門」。当目の岩吉こと「久保山岩吉」の名があった。

他にも当時に関わった人物の名が彫られていたのかもしれないが、石柵の状態は非常に悪く崩壊も危惧される。清水港の歴史を後世に伝えるものとして何とか保存できないものかと考える。

〈編集部あとがき〉正面鳥居のすぐ傍にある石柵には「静岡丸社中」と刻されている。明治十四年に設立された「静隆社」の前身である。静岡丸（二五〇トン）は明治九年工部省所有の電信丸の払下げを受け、清水港―横浜の定期航路に就航した。

榎本武揚篆額（てんがく）の石碑について

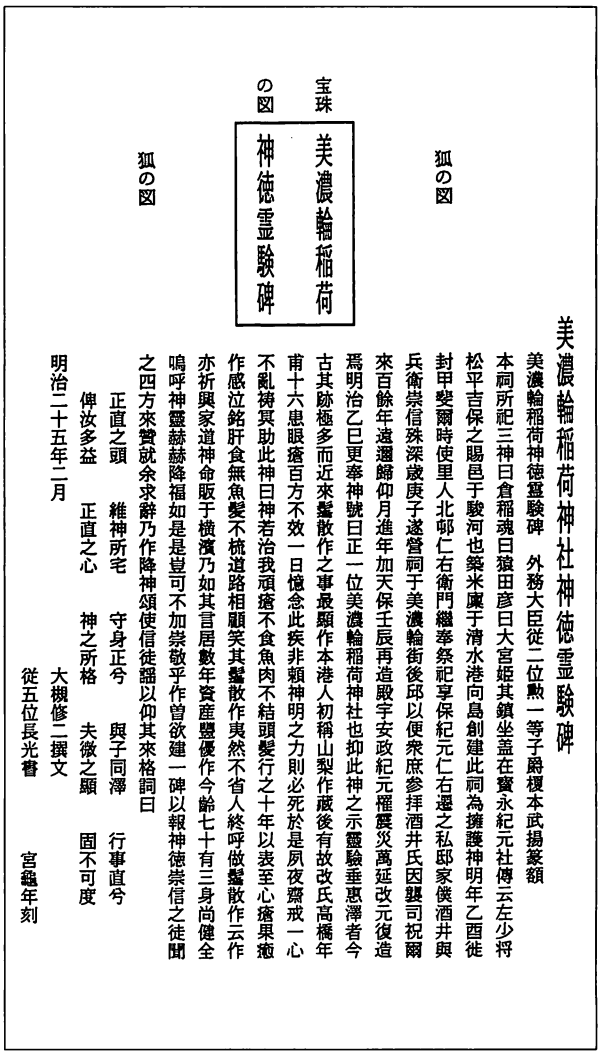
美濃輪稲荷の境内に、あの榎本武揚が関わった石碑がある。正面拝殿に向かって左側に囲われた繁みの中にひっそりと立っている高さ三メートルもある巨大な石碑だ。榎本武揚といえば、次郎長の墓碑銘「侠客次郎長之墓」を揮毫したことで知られるが、美濃輪稲荷の石碑は、次郎長が亡くなる前年、明治二十五年に建てられたもので、篆書で書かれた題字であり、自ら筆をとったものではない。とはいえ、非運に倒れた幕臣たちを率いた榎本武揚の名がここにも刻されているのは、何となく運命的なものを感じる。

この石碑は、「美濃輪稲荷神社神徳霊験碑」と題され、その霊験あらたかな由来を碑文に誌したもので（次頁の図参照）漢文で書かれたその全文と、久保田江濤による読み下し文を併記したものがプリントされて社務所に置かれている。

美濃輪のおいなりさんのお祭りといえば、三月十五日、おいべっさんの西宮神社のお祭りと並んで大変な人出を呼んだものだが、今では昔の賑わいはない。その賑わいを取りもどすためにも、この石碑に書いてあることを、若い人たちに知ってもらうことが必要だ。以下は解説と碑文の要約。

美濃輪稲荷の歴史はそれほど古くはない。そもそもの始まりは、徳川綱吉の時代の宝永年間、柳沢吉保が清水港向島に米蔵をつくった時、構内に守護神として稲荷神社を勧請した。

享保元年（一七一六）、本町の廻船問屋北村仁右



美濃輪稲荷神社神徳霊験碑

美濃輪稲荷神徳霊験碑　外務大臣従二位勲一等子爵榎本武揚篆額

本祠所祀三神曰倉稲魂曰猿田彦曰大宮姫其鎮坐盖在寶永紀元社傳云左少将松平吉保之賜邑于駿河也築米廩于清水港向島創建此祠為擁護神明年乙酉徙封甲斐爾時使里人北邨仁右衛門繼奉祭祀享保紀元仁右遷之私邸家僕酒井與兵衛崇信殊深歳庚子遂營祠于美濃輪街後邸以便衆庶參拜酒井氏因襲司祝爾來百餘年遠邇歸仰月進年加天保壬辰再造殿宇安政紀元罹震災萬延改元復造焉明治乙巳更奉神號曰正一位美濃輪稲荷神社也抑此神之示靈験垂恵澤者今古其跡極多而近來鬘散作之事最顯作本港人初稱山梨作蔵後有故改氏高橋年甫十六患眼瘡百方不效一日憶念此疾非頼神明之力則必死於是夙夜齋戒一心不亂祷冥助此神曰神若治我頑瘡不食魚肉不結頭髪行之十年以表至心瘡果癒作感泣銘肝食無魚髪不梳道路相顧笑其鬘散作夷然不省人終呼做鬘散作云作亦祈興家道神命販于横濱乃如其言居數年資産豐優作今齢七十有三身尚健全嗚呼神靈赫赫降福如是是豈可不加崇敬乎作曽欲建一碑以報神徳崇信之徒聞之四方來贊就余求辭乃作降神頌使信徒謡以仰其來格詞曰

正直之頭　維神所宅　守身正兮　與子同澤　行事直兮
俾汝多益　正直之心　神之所格　夫徴之顯　固不可度

明治二十五年二月　大槻修二撰文
従五位長光睿　宮龜年刻

狐の図

宝珠の図

美濃輪稲荷
神徳霊験碑

狐の図

衛門は、柳沢吉保より稲荷神社を譲り受け、祠を自宅内に移した。（現在の当主は北村英明氏）

北村仁右衛門は屋号を「北仁」と称し、吉野屋系の北村とは別の系統に属する。甲州米を江戸に運ぶ米輸送専業だ。甲府市史には「清水港から江戸への廻米輸送は〈上乗〉の責任で行われた」とあり、本町の北仁は上乗だったのである。

その北村仁右衛門の家僕に酒井与兵衛という人物がいた。彼は長年つとめあげ定年退職するとき、当主の仁右衛門に乞い、自分の住む美濃輪の地、八軒屋敷のうち裁許山に移し、奉祀した。これが今の美濃輪稲荷の原型である。与兵衛は大変信仰心の厚い人であった。その後、天保の造営、安政地震の復興をすすめ、明治二年には、稲荷本宮に請い正一位美濃輪稲荷の称号を得ている。

霊験についての効能は、古くから事例がたくさんある。なかでも「鬘散作」のことがもっとも顕著な一例であろう。

作は清水港の人、はじめ山梨作蔵と称したが、後に訳あって高橋年甫と改めた。十六歳の時、眼病を患い、あちこちの医者にみてもらったが効なく、これは神明の力を頼むほかないと、一心不乱に祈った。神に誓った。神がもしわが頑固な病を治してくれたら、自分は大好きな魚肉も食べない、頭髪も結わない。その約束を十年まもった。眼病は完治した。感泣した作蔵は魚を食べず、髪を梳ずにいた。人びとは、そのボサボサ頭を笑い、鬘散作と呼んだ。

（T）

編集室から

●平成四年五月六日、清水市役所八階の大会議室で設立総会を開催してから、今年でまる十五年が経過しました。

今年の総会も梅蔭寺本堂で行われます。会報21号は、その席上で配布されます。

●この十五年、次郎長にとって大きな出来事といえば、国立歴史民俗博物館で開かれた「民衆文化のつくられたヒーローたち（アウトロウの幕末維新）」で次郎長が取りあげられたことや、NHKが木曜時代劇で次郎長ドラマを放映したことなどが真っ先に頭に浮かびます。もう一つ特筆しなければならないのは、会の活動を通じて伏谷如水の市原市や天田愚庵のいわき市の皆さんとの交流が活発に行われたことではないでしょうか。人の輪が広がって行くことは、誰よりも次郎長が喜んでくれることだと思います。

●交流といえば、清水郷土史研究会の皆さんとの交流もあげられます。郷土史家として造詣の深い松浦元治さんもその一人。知る会主催の足助町・岩村町のツアーにも参加、紀行文も寄せて下さいました。未発表が心残りです。

●平成十九年三月十五日、清水郷土史研究会理事松浦元治さんは八十三歳をもって永眠されました。この欄を借り謹んでご冥福を祈ります。

●本年度の史跡探訪ツアーは、まだ手をつけていない四国金比羅まいりなども検討中、何かいい御意見があれば、事務局へお寄せ下さい。

（T）